

大宮御所の地下通路

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 地下通路A (北東から)

大宮御所 京都大宮御所（以下、大宮御所）は、江戸時代初期の後水尾天皇が譲位して上皇になった際に、院の御所として御所東南の地に仙洞御所が設けられたのにあわせ、中宮東福門院のために設けられたのが始まりです。最後の居住者が大宮（天皇の母親）であったため大宮御所と呼ばれましたが、皇后の場合は女院御所と呼んでいました。大宮御所は他の御所と同様、居住者が変わる度に建て替えられるのが基本で、焼失による建て替えも合わせると合計9回の建

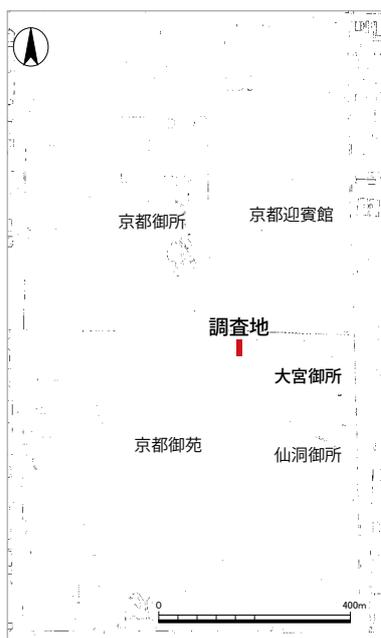


図1 調査位置図

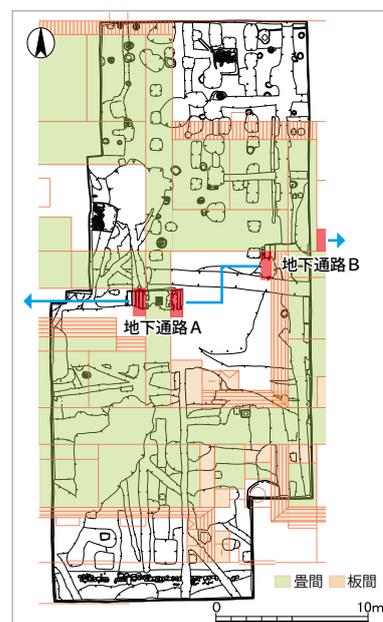


図2 検出遺構・指図合成図
(指図よりトレース)



写真2 地下通路A西階段の新旧（南東から）



写真3 現在の京都御所に設けられた地下通路「下向」

築が行なわれました。最後の御所は英照皇太后（明治天皇の母）のために慶応2年（1866）に建てられました。東京奠都によって居住者不在となり、明治時代の御所公園化の際に敷地を縮小し、建物のほとんどが取り壊されて現在に至ります。

調査の概要 大宮御所の参観者休憩棟の新築工事に先立って2015年に発掘調査を行ないました。慶応度御所（1866年）から延享度御所（1747年）まで計4期の御所の調査を行なったところ、慶応度と文化度（1817年）の調査で地下通路を検出しました。

地下通路は2基箇所検出しましたが、調査地内で良好に検出できた地下通路A（写真1）をみてみましょう。地下通路Aの検出時の規模は幅0.84m、長さ3.92m、深さ1.10m、4段の階段で上り下りでき、床の中央には排水用の浸透枅が設けられていました。階段1段の踏面は0.16～0.18m、1段の蹴上は0.20mです。地下通路

の表面は漆喰で仕上げられており、耐水性に優れています。南側はレンガ積みの構造物によって大きく壊されています。この地下通路は嘉永の大火（1854年）で焼失した文化度御所の階段を塗り直したもので、表面の漆喰を取り除くと下から火事で被熱した漆喰階段が現れました（写真2）。壁と床はそのまま再利用されていました。

この地下通路は慶応3年（1867）に描かれた「皇太后御所ノ図」（以下、指図）に記されており（図2）、地下通路AとBを通ることで中庭を経由して東西に行き来できる設計となっています。指図の註釈には「下々道」とあります。渡り廊下によって部屋をつなぐ御殿建築の場合、地下通路を設けることによって建物の維持管理や緊急時に昇殿することなく建物の中を抜けていくことができるようになります。指図をみると11箇所の下々道があります。現在の京都御所にも「下向」と呼ばれる多くの地下通路があります（写真3）。廊下の壁に

沿って地下通路部分に門扉が設けられた構造になっています。地下通路Aをみると床面の両脇に正方形の礎石が設置されています。この位置に廊下の壁に沿った門扉が設けられていたのでしょうか。

発掘調査では廊下と地下通路の位置が特定できたことから、指図に当てはめることができる貴重な成果となりました。ちなみに、礎石の位置から廊下の柱間は1.81m（6尺）に復元できます。京間は畳6尺3寸をもとに柱間を設定するため柱間が約2mですので、渡り廊下は江戸間で設計されていることとなります。設計・施工は江戸幕府御用大工頭中井家によるものです。中井家は全国の主要建物を手がけており、京都の御所でも京間ではなく、江戸間に統一したのでしょうか。

京都市内の発掘調査で見つかった地下通路は、ここ以外に西本願寺、撰閣家的一条邸跡と二条邸跡などがあります。

（持田 透）